

## 「鍼灸は現代医療をリードする」

半身症候鍼灸法研究会代表 茂木昭

### 序論

なぜ鍼灸は現代西洋医学を超えなくてはならないか？

第一の理由には世界中で行われている現代医療の主流である現代西洋医学が、社会の要請に応えていない種々欠陥を持つからである。もしこの医療、医学が完璧であれば、鍼灸その他徒手医療の存在も敢えて要望されることもないだろう。現代西洋医学が臨床医学と基礎医学とで成り立ち、相互に協力し合って発展するものとされているが、基礎医学が臨床医学に役立てる完璧な情報提供しているとは言えず、更には臨床医学も一臓器、一疾患の専門科の細分化を医学の発展として目指してきた現在、診療科が細分化され37科にまで定められたという。

現代西洋医学が専門化医療を医学の進歩とした結果、救急医療、外科手術面で発展を遂げてきた反面、全般的多疾患、多種障害が治せない状況が継続している。細分化医療の弊害は専門領域の診断しかできない医師を生み、一患者の診断が院内でたらいまわしされる弊害が問題となり、近年、内科では総合内科専門医の認定の動きが起きている。

さらに現代医療の問題点に医学的支柱が対症効果を追う医薬品中心医療であることも現代西洋医学臨床の医学的限界となっている。対症治療医学が症状の消失、軽減を目標とし、病態の原因究明を軽視する医療となり、難病のみならず日常的に見られる多疾患にわたる原因不明の医学となっている。そして生体維持機構が生み出すところの症状の存在をそのまま病気の実体として、症状を最大の治療対象とされているが、肩こり、腰痛についてさえ病態を挙げるのみで生体機能から見たその原因、意味は未知のままである。

年齢的問題に限定される肩関節周囲炎についてさえ原因に石灰沈着性腱板等を挙げ、手指、手関節腱鞘炎についても治りが非常に遅い。種々内臓疾患も決め手は手術法で、多種にわたる疾患、障害が原因不明とされたまま特定臓器、組織を単独に追うだけで相互組織の関連性を軽視する。鍼灸における古典鍼灸理論と同様の生体機能の問題を追うより治療理論が先に設定され、生体を治すよ

り理論を治すかのような傾向がある。薬品による対症治療からは当然、自然治癒力さえ損なわれている。世界的に補完統合医療が注目されていると言われることも今日の医学に対する警鐘であろう。

この現代西洋医学の診断理論の盲点をついた医療に米国を中心に発展したカイロプラクティック、オステオパシーの徒手医学がある。生体機能を骨格系の構造、その神経圧迫面からとらえる視点からは、生体を一面でしかとらえられないCT、MRIの静止的画像診断、血液検査の盲点を突き、難治とされている種々疾患に効果を上げている。脊柱、骨格面からの生体を構造面からとらえる生体理論は基礎医学的にその重要性が想定できるにもかかわらず静止画像診断、血液検査を高度医学とした固定的視点が医療的有効性における進歩、発展性に限界ある医学としてきたのである。

医療的閉塞感が持たれているこの現代医療にあって、それに代わる社会の期待に東洋医学とされている鍼灸医学、臨床は果たして応えられているだろうか？あるいは本来その可能性が存在するものなのだろうか？

この点で鍼灸界現場からはどのように鍼灸を理解しているのだろうか？現代医療の不明瞭な病名しか挙げられない不定愁訴、慢性的疾患、心身症に全身的アプローチからとらえ効果を上げていると医学的有意性をアピールしていても、現代西洋医学の医療的地位を脅かす状況にもなっていないばかりか、一部を補完する医療にさえなっていない。

鍼灸を医学的根拠があるとアピールするのは鍼灸業界だけで、基準に挙げるその現代医療に限界があることはすでに一般社会の常識となっていることである。鍼灸界の自覚とは裏腹に一般社会の目が民間療法との境界が不鮮明な現状鍼灸を的確にとらえていることは、低い国民鍼灸受診率、及び開業権があるにもかかわらず低い開業率に表れ、臨床水準の向上に関心を向ける鍼灸師は見当たらない。あたかも鍼灸学校を柔整院向けの就職口機関、訪問医療就職の窓口としている様相がある。

社会の鍼灸観に「鍼灸は効くか、効かないか」の言動が常套句で、鍼灸界指導者層に至るまで「鍼灸は効くのか効かないのか」という用語を臆することなく使用する。効くか効かないかとは何か？病院医療では治るか治らないかとは言うが、効くか効かないの表現はない。一般社会から鍼灸界指導者層まで鍼灸を民間療法水準に甘んじる体質を自らさらけ出しているのである。

ここに鍼灸の現状及び今後の医療的可能性について筆者が主宰する研究会における鍼灸臨床の実体について挙げてみたい。

1 本の細鍼の生体反応が全身機能全体に波及することは、一匹の蟻が足を這うときを想像すれば容易に理解できることで、それが更に毛虫であれば一層納得できるだろう。皮膚という鋭敏な脊髄神経系に作用し、自律神経系にも波及する。一瞬呼吸が苦しくなり、動悸もする。眼も見開かれ、鳥肌が立つだろう。経穴とは関連のないこの作用は何か。そして経穴数 361 穴の意味とは何かを改めて再考する必要があるのではないだろうか。

ここで疑問を抱くのは、現代西洋医学が生体機能に有害性を有した薬品治療を軸とする医学にもかかわらず、鍼という金属的微細損傷、刺激の鍼灸でしかなく、その上、足を這うアリの如く、全身組織にわたり生体治癒力を波及させうる鍼灸の目標が現代西洋医学を凌ぐところに置こうとされない鍼灸界の姿である。

もし、微弱な生体反応を全機的にとらえ、その組織間の機能関連性を追究した診断法であれば、全身組織に関連する多疾患、障害を改善できるはずである。この視点から生体を診た診断理論による筆者臨床での刺鍼 1~2 箇所のみ鍼治療をここに挙げてみたい。それは実人数、数万人の臨床例におけるあらゆる疾患においてその有効性を検証してきている。また、研究会においても平成 14 年より指導にあたってきた方式である。

なぜ、今日の鍼灸が目覚ましい効果を上げられなかったのか？ 3 年間の専門学校、4 年大学制から、大学院制まで制度化され、古典鍼灸理論、多くの現代西洋医学を学んでも、それらの教育制度の結果は代替統合医療的鍼灸、サロン鍼灸、マッサージ的スポーツ鍼灸、更には効果があると一方的に強要する美容鍼の流行である。大学制度に変わっても疾病、疾患を治す医療から遠ざかるばかりで、民間療法的鍼灸に変わりはない。

停滞する鍼灸危機の根源的の問題点、致命的欠陥、そして鍼灸の進歩、向上を妨げるものは何か？それは実にシンプルである。すべては鍼灸臨床の秘密主義にある。病院医療での現代西洋医学は、あらゆる疾患につき、国民はおおよそその医療的効果の想定ができる。しかし、鍼灸臨床の様子は仕切られたカーテンの中で、親交のある鍼灸師間以外には公開しない秘密主義から、一般鍼灸師から鍼灸界指導者に至るまですべての疾患、障害に対して鍼灸は何に有効なのか、何を治せるのか知らないのである。「アトピー性皮膚炎は治らないね」などは鍼灸学会などで耳にした言葉である。

各鍼灸師が開業鍼灸師の臨床見学を紹介なしに願い出れば、互いに研修ができるのにもかかわらず顔色を変えるだろう。鍼灸には太古より「直弟子相伝」「一子相伝」の秘密主義があった。現代社会に及んでも臨床を見せない秘密主義、見ようとしない無気力さが鍼灸界の土壌にある。

鍼灸師が鍼灸効果を知らないのだから、医師同様の開業権を有しながらも、病院医療における多疾患にわたる鍼灸臨床を行う自信があるはずもなく、開業しても疾病医療から逃げた今日の癒し系鍼灸院を選択するしかない。

鍼灸界が模索して来た鍼灸界の指向を一步外れれば、細分化診療から各生体組織間の相互関連性を忘れた現代臨床医学を超える鍼灸医療が実践できる。

元々、古典鍼灸理論肯定派であれ、否定論であれ、あるいは折衷論であっても鍼灸は自由に存在することが可能な多角的視点からの生体診断が実践できる利点がある。漢方では江戸時代中期に古方派が起き、陰陽五行説を空理空論と否定していた理論が主流となったことに注目するべきであろう。鍼灸では昭和50年代後半に経絡論争が起きたことがある。固定的思考の陰陽五行説、虚実補瀉の古典鍼灸理論さえ消去すれば、進歩、新発見のない鍼灸から、次々解明される新発見理論による構築もすべて制約がなくなる。これほど自由で可能性の高い未知の医療はないだろう。大衆の視点を無視した画一的現代西洋医学に迎合することが鍼灸の科学派と称し、自ら鍼灸医療を貶めてきた、

国内ではいまだに中国は鍼灸の本場であるという幻想があり、人気が復活している中医学鍼灸も、留学者は帰国後、中医学鍼灸の実体を明かせない。鍼灸医療は権威的理論により治せるものではなく、鍼灸臨床家一人ひとりが自身の臨床から発見、検証して臨床理論化する医療である。発展性の高い誰でもが名人的治療水準を目指すべき個人的専門性の高い医学である。

ここに記述する多科にわたる診断法、刺鍼法は、従来鍼灸とは異質の治療水準を上げている刺鍼法についての治療観と解説で、すでに「新鍼灸法の実践」と題し刊行したものである。

以下のテーマで順次、考察して行く予定である。

1. 鍼は伝統か、変革か。中医学と日本鍼灸
2. 現代鍼灸は発展したか、衰退か（美容鍼と科学化鍼灸）
3. 鍼灸の科学化の疑問と検証
4. 現代西洋医学を超える鍼法の存在

#### 1. 鍼は伝統か、変革か。中医学と日本鍼灸

鍼灸医療の歴史を振り返ると、二千数百年の歴史を持つ古典鍼灸理論体系を遵守しそれを忠実に再現する古典派、あるいは中医学の伝統鍼灸と、それに対し現代医学的解剖学を基本とするか科

学派鍼灸理論があり、両者の折衷派である中国内での中医学を主流とした中西医结合医学、あるいは日本国内でも東洋医学と西洋医学の融合させるという鍼灸派がある。

東西融合医学鍼灸はともかく純粋な中医学と日本伝統医学については、古代からの古典理論体系の解説がすべてとなり、その伝承理論に、より忠実に再現、回帰することが基本であると同時に究極の水準の医学もそこに求め、従来治らないものについては治らない医療であり、進歩する医療ではない。

古典の解説が基本の伝統鍼灸の問題の一つは、そこには新しい発見、新しい理論への展開が生まれることがなく、近代医学の発展とともに、明らかになった種々な疾患に対する臨床対応に困難をきたしていることである。伝統鍼灸理論派において再現される鍼灸は、古代における臨床技術、臨床効果もすべて古典文献解説による文字からの理論であり、臨床の実体は想定上のものである。更に一子相伝、直弟子相伝の臨床の秘密主義から、伝承理論の信頼性も考慮する必要がある。

日本漢方には、後世派、古方派がそれぞれ競い合って発展してきた歴史がある。鍼灸では中西医结合医学、国内で折衷派が両方の長所を結合させるという派があり、それぞれの長所を統合、結合する利点を説くが、同じ人体という対象に対しての医学であれば、それぞれ長所短所があるという医学として不完全医学である証である。不完全医学を統合しても向上するものではなく、互いに異なる理論の補完の中西医结合は中医学が行き詰ったことの表れであり、国内折衷派も同様にどちらも不完全医学の証明でもある。中医学では腰痛に対する毫鍼刺鍼で効果が出なければ、麻酔による神経ブロックを行い、深部の組織を強刺激する外科的小刀鍼がある。伝統重視の中医学理論、伝統鍼灸理論では現状医療水準の維持であり、現実の多疾患にわたる難治疾患治療の向上から、未知の高度医療鍼灸へ発展する可能性は見い出せない。公開臨床による実証性の高い鍼灸にしない古代理論の解説に終わる伝統医学であれば衰退し、次代に行き残れないだろう。